

Women's Sports Foundation Japan

WSF Japan News

'97 December Vol.35

- Mail Box／前略 会員の皆様へ ミツ谷洋子…2
- Interview／米女子プロバスケットに初挑戦 萩原美樹子さん…3
- Women's Sports／女性スポーツの歴史を考える(上)…6
- Report／国際会議で初の講演 北田和美…7
- Column／あまりに貧困な環境 関谷亜矢子…8
- Enjoy Sport!／大成功をおさめた女性だけの水泳大会 本原光知子…8
- Hot Line／会員の広場…9
- Topics／各紙掲載記事より…10
- Information／事務局だより…11



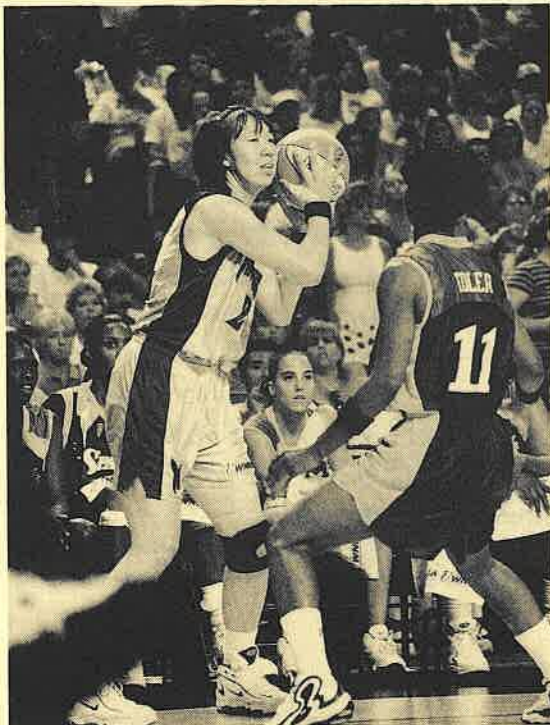
いはどんなところでしょうか。

「ルールは一緒だけれど、試合の進め方が日本とは違って、これが同じ競技なのかと思うほど意外なことがたくさんありました。日本の試合でこのタイミングならパスが来るぞとか、シュートをうつぞというのがありますが、米国ではそれが全く通用しない。日本では“空いている人”にパスをするのがセオリーのところを、自分でシュートにいってしまふ。『さあ、ここは私にパスが来るでしょう』と待っていても来ない。いくら待っても来ない。先ほども言いましたが、まず根本的には個人がプレーをするということです。自分のプレーをどんどんアピールします。

それと、ボディークラウドが日本に比べるとすごく激しい。けが人が続出し、血を見ない日はありません。日本では相手を傷つけるほどのボディークラウドはしません。米国では相手チームが倒れようものなら、ファンは大喜び、拍手喝采です。でも、それだけ身体的にタフだということなのでしょう。

日常生活、社会の中でのバスケのあり方も違います。身近にバスケがあります。例えば家にリングがあったり、家族の中に必ず1人はバスケをしている人がいたり。社会の中にしっかり浸透しています。私は10歳の時から始めましたが、米国では幼稚園の頃からバスケをしています」

▼“米国のバスケ”に戸惑うことも多かった



—WNBAでは産休を取ったり、バスケ以外の職業を持ってプレーしている選手がいますが、女性の地位が確立しているということなのでしょう。

「すでに確立しているのか、確立されつつあるのか、3カ月しかいなかったのでもよく分かりませんが、少なくともそういう方向に向かっていることは確かでしょう。WNBAは女性たちがつくりあげているリーグです。スタッフも役員もほぼ100%女性です。WNBA8チーム中、男性のヘッドコーチは1チームだけです」

—30代後半の選手もたくさんプレーしているようですね。日本では、20代後半になると「引退」を考える雰囲気があるように思いますが。

「そうですね。雰囲気というより、もう、そういうものだという、定説になっています。私が実業団に入った頃はだいたい、4~5年目になるとベテランといわれ、7~8年もいると大ベテラン、長老と言われるくらいでしたから。最近では日本でも選手寿命が延びてきましたが、欧米に比べるとまだまだです。

『どうして日本の選手は結婚すると引退しなくちゃいけないの。私は私の体がストップというまでプレーしたい。何で、そんなに若くしてやめてしまうの?』むこうでそう聞かれて、私は説明できませんでした。結局これは、その人の生き方の問題なのだと思います。自分の人生の中で、バスケがどのくらいのウエートを占めているのかということだと思います。

それに社会もそういう選手を応援しています。産休を取った選手は妊娠に気づいた時、プレーを続けるかどうか、とても迷ったそうです。でも、社会が予想以上に彼女を応援しました。特に女性の支持が大きかった。出産後2~3週間で復帰しました。このことがあって、かえってWNBAの注目度が高まりました」

もっと余裕を持ってプレーを

—今、日本リーグで最年長の人は何歳ですか。

「はっきりはわかりませんが、30歳以上の人が何人かいます。意外と日本にも30代の選手はいます。でも、マスコミなどでもあまり取り上げないので、みんな知りません。もっと彼女たちを表面に出してバックアップしてあげればよいと思います」

—萩原さんがWNBAに挑戦したことが、若い選手の

動みになっているのではありませんか。それに日本のバスケ界も変わってくるのでは。

「アトランタオリンピックの時、最高の舞台で個人としては最高のプレー(得点数は全選手中5位。チームは7位)ができて、バスケに対して自分の中ではある程度、完結しました。もうこれでいいや、という感じでした。そんな時にWNBAの話が来たので、その時はこれから続く日本選手のために道を開こうとか、そういった意識は全くありませんでした。とにかく自分の可能性に挑戦したいという思いでした。でも、私のこの挑戦に対して、若い人から、勇気づけられたという手紙をもらったりするととても嬉しいし、ありがたいと思います。

日本のバスケ界がどのように変わるか、まだ、よくわかりませんが、とにかく、一人でも多くWNBAの世界を体験してほしいと言っています。そういう選手が増えて、質の高い試合、面白い試合を日本リーグでできるようになれば、お客さんももっと入るはずですよ。

そう言えば、日本のファンの反応とか、バスケの注目度が変わったと思います。日本リーグが開幕してまだ、東京で2試合しかやっていませんが、今まであまりお客さんが入らなかったのが、今回は多く入っていました。試合中は、私へのマークがきつくなりました。相手チームが私のミス誘うプレーをすると、みんな大喜びするんです。去年まではなかった反応ですね。

バスケ界全体にはもっと、余裕があればよいと思います。自分に対するストイックさならよいのですが、他人が強制するストイックさがある。これには限界があると思います」

プロとして、女性として

—WNBAで「プロフェッショナル」としてプレーしたわけですが、具体的にプロだと感じたのはどんなことですか。

「最初に所属していたサクラメント・モナークスで、チームの負けが込んできた時、ある日突然、全く知らない選手が練習に入ってきて、昨日まで正選手だった人が補欠に回されていました。事前の通告など全くなく、本当にいきなり補欠に回されたそうです。代わりはごまんといるから役に立たない選手はいらない。あなたでなくてもいいということです。この辺はとてもシビアです。です



▲フェニックス・マーキュリーは準決勝に進出

から選手は努力せざるを得ません」

—女性プレーヤーとして感じることはありますか。

「普段は特にこれといって感じません。というか、気づかないという方が正確でしょうか。でも、同じ人間レベルで考えた時、男の人と比べると、恵まれていないところがあると思います。例えば、WNBAでも報酬面で、男性プレーヤーとは大きな差があります。差があるのは当たり前と思っている選手もたくさんいます。私もそうでした。でも、よく考えると、なぜ、これが当たり前なんだろうかと、同じことをやっているわけですから、扱いも同じにしてよいのでは、と思うようになりました。WNBAでは選手組合を作って、これからいろいろなことを改善していこうという動きがあります。そういう問題意識の高い選手が大勢います」

—これからの目標や希望をお聞かせください。

「バスケは4~5年やって、その後、大学で勉強しようと思っていました。それが思いがけず、海外でプロという世界を見る機会も与えられて、これまで考えてきたこと、信じてきたことの書き換えを迫られている時だと感じています。例えば自分の中で、当たり前だと思っていたことに対して『そうじゃなくてもいいんだよ』と考える様になりました。正直、自分がこれからどうしたいか、今はまだよくわかりませんが、まずは来年もWNBAに参加して、プレーしたいと思います」

◇

この取材が終わった後もすぐ、次の取材が待っていました。日本リーグも開幕したばかりという、ハードなスケジュールの中にもかかわらず、快くインタビューに応じてくださいました。「今年、まずは、WNBAというものを経験をしたので、来年はそれを楽しみたい」という言葉に確かな自信が感じられました。米国へ行く前は不安8、期待2だったそうですが、今、その数字は逆転しているようです。

(97年10月30日取材・聞き手/WSFジャパン事務局長 高橋昭子)

Women's sports

女性スポーツの歴史を考える (上)

— 上智大学の学生レポートより —

日本の女性スポーツの歴史は、女性の社会進出と歩調を合わせ、普及発展してきました。言葉をかえると、スポーツ界における封建的な女性像からの決別の歩みともいえます。女性ならではのこうした歴史について、“今どきの若者”はどのように考えているのでしょうか。

今回から2回にわたり、上智大学の男女学生(男子50人、女子41人)のレポートから、印象に残ったものを整理してご紹介してみましょう。(事務局)

「男女平等を、男性が強認識すべきだ」(男子)

このレポートは昨年、WSFジャパン会員で上智大学講師(現助教)の島健さんが受け持った「人間と運動・スポーツ」の講座の受講生が書いたものです。オリンピックの商業化やドーピング、環境保護の問題など、スポーツを様々な側面から取り上げた講義のテーマの一つが「女性スポーツ」でした。

教材として使用したのは、明治初期から現代までの女性とスポーツのかかわりをまとめたスライド60枚と資料です。三ッ谷代表が1986年の第1回女性スポーツ京都会議の講演のために作成しました。

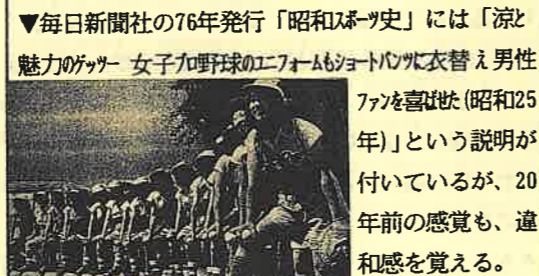
明治初期に西洋文化の一つとしてスポーツが導入されて以来、女性のスポーツが社会的になかなか受け入れられなかった理由の一つに、「スポーツは伝統的な女性らしさと相反するものである」という根強い考え方があります。ある男子学生は、1949年(昭和24年)に発足した女子プロ野球について、次のように述べています。

「その後、発展しなかったのも、『女性は家に』という男性の勝手な認識が強かったせいではないでしょうか。現在は改善されてはいるものの、まだ日本のスポーツ界には女性差別が残っています。これは非常に残念なことであり、今後、男女平等の意識を男性が強意識することが、肝要ではないでしょうか」

また別の男子学生は、伝統的な「女性らしさ」という概念は、広く日本人の意識の根底に潜んでいることを指摘しています。

「現代は自由な社会なので、女性がスポーツをやるのは良いことだと思う。しかし、たとえば女性が空手をやっている、(技術の優劣に関係なく)マスコミに取り上げられ注目されるようなことがある。そのような女性を見て驚いているような我々も問題があるような気がする。根本的な面を変えなければ、『男女平等』は達成できないと思う」。

一方、女子学生は「明治、大正、昭和初期とスポーツをする女性は、きっと肩身が狭かっただろう」と、同性として同情しています。



▼毎日新聞社の76年発行「昭和スポーツ史」には「涼と魅力のガッター 女子プロ野球のフォームもショートパンツに衣替え 男性ファンを喜ばせ(昭和25年)」という説明が付いているが、20年前の感覚も、違和感を覚える。

「美しさ」に縛られる女性スポーツ

女性スポーツは興行的側面から、“見た目”が厳しく問われてきたという状況もあります。これに対して「男性を喜ばせるための見せ物的スポーツは、やはり悲しい」。「女性は美しくなければ人気、不人気につながるという話は、ショックを受けた」と、女性ならではの感想を吐露しています。男性社会が創りあげた「女らしさ」という枠組みの中で、女性スポーツがゆがんで発展した部分もあることを、嘆かずにはられません。

今回のレポートを書いた学生たちが20歳前後とすると、84年のロサンゼルス五輪のときが小学校低学年、88年のソウル五輪が6年生か、中学1年生だったと思われる。それまで男性のスポーツと思われていたマラソンや柔道が、次々にオリンピックの女子種目として認められるようになった時期です。

「たいていのスポーツは男女とも同じようにやっている、『女性はスポーツをやるものではない』という(かつての)考え方は、かえって不思議な感じを受けると感想を述べた女子学生がいます。時代の変化を感じさせる記述です。(つづく)

Report

国際会議で初の講演

痛感したコミュニケーションの大切さ

北田和美

時に海外に出て、外から日本を眺めて見ることは重要だと思う。その時、日本にある文化が外国の文化を取り入れ拡大解釈されたり、都合のいいように作り変えられている現状に容易に気付くことができるからである。それを取り入れた人の主観とその時の社会状況の二重のフィルターがかかってしまうことは、ある意味で仕方のないことであるが、時間が経過してしまうと大切な部分が小さくなってしまい、どうでもいい部分がクローズアップされていることに、気付かなくなってしまうことがある。直面している現実を洗い直すには、外の流れを見るとき、外から内を眺めてみるのは効果的だと思う。

この夏、第13回国際女子体育指導者会議に参加した。IAPEGSW(International Association of Physical Education and Sports for Girls & Women)と称されるこの第1回の会議は1949年に始まり、1999年には50回の記念大会が米国で催されるという。

今回の開催地は、女性の手による女性の体育協会がスタートして100年目を迎えるというフィンランド・ラハティ市であった。空の青、湖の青、そして森の緑が印象的なラハティ市は“everything near by”のキャッチフレーズどおり、こぢんまりした静かな美しい町だった。

この会議は、近年ではオリンピックの翌年に4年に1度、開催され、私は第11回のバリ大会(インドネシア)、次のメルボルン大会(豪州)につづき3回目の参加である。

今回は42カ国、312人の参加が予定されていた。「女性の生涯とスポーツ」をテーマに特別講演(10)、口頭発表(80)、ポスター発表(16)、そして実技を伴った発表(約10)などが、7月27日から5日間にわたって行われた。最初のバリ大会に参加して、もっと多くの人と意見交換をしたいと思い、少しずつ英語の勉強を始めたが、今回はじめて口頭発表の機会を得た。今までは物見遊山がメインだったが、発表者になって初めて「国際会議に参加した」という実感がある。青年期をテーマとしたセッションで、「生涯体育をめざした大学体育の在り方」につ

いてである。日本の体育のおかれている現状、学校体育が生涯体育につながらない問題点、そしてつなげていくための視点と、そのための実践例について、不十分な英語ながら発表した。

その結果、私の主張に対しいろいろな立場の人からコメントをいただくことができた。そして、他の国にも同じような流れの部分があること、また独自の問題点やオリジナルな営みの部分も発見できた。

一般的に日本人の発表は、たとえ英語力があつたとしても表現力が乏しく、内容がよくても伝わらないというプレゼンテーション能力の無さが語られる。口頭発表はすべて英語で、とはいうものの英語が母国語でない人も多い。様々な国の人々にも理解してもらえるように準備して向かったのだが、正直いって不安もあつた。

しかし発表が終わると、会議の裏方を担当している世話係のフィンランドの人に「あなたの発表はとても分かりやすく理解できた」といわれたのは、嬉しかった。「他の人の発表は専門用語が多く難しいうえ、しゃべりすぎてよく分からない」とのことだった。

▼発表を終えて(右端が筆者)



この発表を機会に、外国の方だけでなく異国の地で出会った日本の方ともコミュニケーションをとれるようになったことは、大きな収穫である。自分の主張をすることによる手応えを、ずっしりと感じている。

さて、日本に帰ってきてから、英会話に対する私の姿勢ははっきり向上した。今、自分でも「何で」と思うくらい英会話にはまっている。と同時に、その道程の遠さにも気づき果然としている。次回の50年記念大会の時は今回、知り合ったWSF ジャパン事務局の高橋さんのように、英語で十分ディスカッションできるようになりたい!!でも2年後なんてすぐ。目標を達成できるだろうか。

(きただ・かずみ)

大阪女子短期大学助教授、ADI、JAFJA会員。大阪女子体育連盟常任理事。

Column

あまりに貧困な環境
メダリストには勇気と感動への代償を
関谷亜矢子

「4年ぶりですね」そういって、清水選手は笑った。本人には、そんなつもりはないのだろうけれど、私には皮肉っぽく聞こえて耳が痛かった。プロ野球などに比べて、ウィンタースポーツの取材は、特にテレビのスポーツニュースのような短い放送枠では、どうしてもオリンピックイヤーに限られてしまう。4年前、リレハンメルで出会った選手たちは歳月を経て、みな顔から甘さが消えていた。

スピードスケートの清水宏保、23歳。すっかりほおの肉がそげ、大人の顔になった。前回の五輪で金メダル候補だった清水は、不本意ながら5位に沈んだ。ライバル堀井学が銅メダルに輝く横で……。その後、人材豊富な短距離陣の中でも、この2人が常にライバル同士。一騎打ちの様相を呈するようになる。そして清水は2年前の3月のW杯で5百メートルの世界記録を樹立。堀井も千メートルの世界記録を出した。2人とも世界と互角に戦い、金メダルを狙える存在なのだ。

そんな清水が、ある時、不満そうにぶちまけた。「W

杯で海外を転戦する時の選手の待遇があまりに悪くて、競技に集中できない。日本代表なのだから、それなりの環境を整えて欲しい」というものだった。報道陣に対して公に語ったわけだから、彼なりの必死の抗議だったと思う。この話に象徴されるように、アマチュア選手であるというだけで、あまりに貧困な環境の中での競技を強いられている。もちろん毎月の強化費、あるいはメダルの報奨金は出る。

しかし、現実には海外での転戦が多く、また競技後の生活保障もない中では十分な額とはいえない。タイや香港ではメダリストは一生、保証されるというし、韓国も金メダリストは終生、年金が支払われるそうだ。

私たち国民は五輪のたびに大いに楽しませてもらっている。各メディアもその話題で何週間も潤い、国だって選手の活躍のお陰で、世界に対して絶好のアピールができる。さらに一人一人がどれだけの感動や勇気を与えられているかまで考えたら計り知れない。だからこそ選手がもっと安心して競技に集中できる環境を整えてあげたい。十分な自戒を込めて、そう思う。間もなく長野五輪である。

〈せきや・あやこ〉 WSFジャパン会員、日本テレビアナウンサー



Enjoy Sport!

大成功をおさめた女性だけの水泳大会 木原光知子

最近、嬉しかったことといえば、何とんでも「ウーマズ・スイム・フェスティバル」の成功です。10月4、5日の2日間、千葉県国際総合水泳場で寛仁親王妃信子殿下をお迎えした第1回大会です。「ゴルフ、テニス、マラソン等には女子の大会があるのに、水泳にはなぜないのか」という疑問が、その発端です。

構想から3年。企画、運営から競技役員すべて女性の手によるものです。資金集めに参加者の募集にと日夜、大会の実現に向けて汗した結果、全国各地から1,900人もの女性スイマーが集まりました。開会式ではマーチングバンドによるパレードに続き、ソプラノ歌手・中丸三千繪さんの君が代独唱。式を盛り上げた最初のレースは、私を含めた往年の五輪選手チームや、働く女性チームなどによる「ファンクティック・リレー」。記録を競わないリレーで、特別スターターの女優、佐久間良子さんには、会場の2,500人の観客から盛大な拍手が送られました。

いまだかつて水泳界にこんなに素敵で感動的な開会式があったのでしょうか。鳥肌が立ち身震いするような、華やかな開会式でした。この大会は「ウーマズ・マスターズ長水路選手権水泳競技大会」と並行して、「泳ぎ方教室」などのイベントも行いました。楽しい企画が盛りだくさんということで参加者から好評をいただきました。大会を無事に終えた時、涙がこみ上げるほどの感動と喜びを実感し、また来年度の大会への自信と勇気が湧いてきました。(WSFジャパン会員、ケイ・アブ・エム・インターナショナル 代表取締役)

Hot Line

会員の広場

高橋義雄 (東京大学大学院生)

私は大学院の博士課程に在籍しながら、サッカー関連の仕事をして3年目になろうとしています。最近、スタジアムで感じることは、女性がゲームや戦術について語るようになったことです。正確な戦術眼かどうかは別にして、選手起用や作戦について声を出す女性が増えています。

女性のスポーツを考える時、健康の維持・増進が目的のエクササイズ以外に、人類が創造してきたスポーツの、ゲームとしての理解度を高めることも大切なことです。スポーツはゲームのルールをお互い理解し身体活動を行うことで、リアリティーの高い非言語コミュニケーションを活発にします。これは選手同士だけでなく、観客と選手、観客と観客のコミュニケーションにも拡大していきます。

スタジアムでサッカーを通じたコミュニケーションをする女性が増えていることは、うれしい限りです。より多くの女性が密度の濃いスポーツコミュニケーションに参加してほしいと思います。(東京都文京区在住)



末継みどり (電通計算センター)

この10月に入会しました。きっかけは、スポーツとは全く関係のないワイン。大好きなワインについて、もっと知りたい(ついでに飲みたい)と思い有志で始めた「ワインの会」で、代表の三ッ谷さんとご一緒させていただくうちに、このWSFジャパンのことを知りました。

私自身、スポーツとは、たまにテニスをしては筋肉痛に苦しむ程度のかかわりしかありません。ただおしゃべりと飲んで食べることに夢中で、肝心のワインについてのうんちくは、毎回、二の次のワインの会同様、参加することに意義があると思い、入会させていただきました。

その他、最近はじめたことは、英会話のレッスンで



す。毎回「週末は何をして過ごしたか」という質問に悩まされています。私にとってたいの週末は、ウィークデーの疲れをいやすべく、ひたすらボーッとリラックスするためのもの。週末を大事にするオーストラリア人教師の彼には、何もしない休日など考えられない様子。WSFジャパン入会を契機に、週末はテニススクールにでも通い始めようかと考えているところです。(神奈川県横浜市在住)

高橋昭子 (WSFジャパン事務局長)

この夏、フィンランドへいってきました。首都ヘルシンキから北へ車で1時間程の、ラハティという街です。「スポーツ・シティー」とも呼ばれるラハティでは様々な大会や、スポーツ関連の会議などが開かれています。今回、私がこの街を訪れたのは、第13回国際女子体育指導者会議に参加するためでした。

4年前の12回大会(豪州・メルボルン)で知り合った人たちとも再会、近況を話し合ったりしました。今回も日本から多数の参加(開催国フィンランドに次ぐ参加者数)がありました。前回の会議では、日本人同士かたまってしまい、あまりほかの国の人たちと交流を持っていない、という印象がありました。しかし、今回は、あちらこちらで様々な国の人と談笑する姿が見受けられました。日本人の口頭発表もスライドなどを使い分かりやすかったと思います。

今回、私を知り合った、北田和美さんもそんな日本人参加者の一人。これをきっかけに無理をいって会議についての原稿をお願いしてしまいました(7ページ・Report)。

赤ちゃん連れや、脚にギブスをしている人、夫婦・親子で参加している人たちもいて、スポーツに対する積極性が感じられた会議でした。(東京都渋谷区在住)



▲市長も出席してホテルで行われた 地元の